妊婦さんのための家と妊娠・中絶後相談の20年

2005.03～2025.02

一般社団法人 ライフ・ホープ・ネットワーク

感謝のことば

祝・ライフ・ホープ・ネットワーク創立20周年！ぱちぱちぱち〜〜
さて、私は誰に向かって拍手をしているのでしょうか？

創立者のシンシアに。
日本語も日本文化も知らない外国人というハンデにひるむことなく団体を立ち上げ、
神様の使命を20年間貫き通した。

これまで関わってきたスタッフに。
シンシアの情熱に圧倒されつつ、シンシアの手となり足となり友人となった。

利用者・相談者に。
こんな頼りないボランティア団体を頼り、小さな命の尊さをどんな生命倫理の教科書よりも鮮やかに教えてくれた。

支援者に。
小さな歩幅でゆっくりとしか進まない活動を辛抱強く支え続けた。

神様に。
弱く欠けだらけの団体に、人を助けるという大きな仕事を与え、20年間導き続けた。

全国的に妊産婦の支援機関が増えた今でも、私たちの持つ歴史と運営体制はユニークなものであると思います。
このユニークな（時に扱いづらい）団体に過去20年の間お付き合いくださりありがとうございます。
次の20年も見守り、ともに歩んでいただけましたら幸甚です。

心からの感謝を込めて
一般社団法人ライフ・ホープ・ネットワーク
代表理事　富田美代子

3分で知るライフ・ホープ・ネットワーク

ライフ・ホープ・ネットワークって何をするところ？どんな人たち？
私たちの3つの活動の柱をご紹介します。

居場所のない妊婦さんのための家

妊婦さんへの住まいの提供を「ホームステイ」と呼んでいます。その名前の通り、施設ではなく「おうち」、普通の一軒家で家主のシンシアと一緒に家族のように暮らします。病院や区役所に付き添い、共に食卓を囲み、これからのことについて一緒に考えます。
出産後、シングルマザーの場合は2か月、特別養子縁組の場合は1か月滞在可能です。

365日 一緒に考える妊娠相談

妊娠・中絶に悩む方からのご相談をメール、電話、対面で受け付けています。土日祝日でも年末年始でも、毎日朝10時から夜8時まで相談可能です。思いがけない妊娠をしてこれからどうすればわからない方や、産むかどうかを迷っている方のお話を聴き、何が最善かを一緒に考えます。必要に応じて医療機関・行政機関への連絡や同行をします。

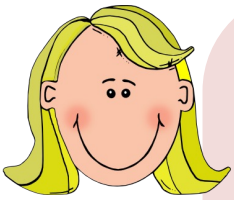
誰にも言えない苦しみに寄り添う 中絶後カウンセリング

人工妊娠中絶後に精神的に苦しむ方向けに無料のカウンセリングを提供しています。全12回から成る短いテキスト（または動画）を基に、カウンセラーとメールのやり取りをしながら心を整理していきます。電話や対面での相談も可能です。

20年のあゆみ

創立者シンシアが日本に来てから25年、ライフ・ホープ・ネットワーク（以下LHN）の創立から20年。
これまでのあゆみをシンシアのコメントとともに振り返ります。

2000年　シンシアがアメリカからの宣教師として来日。



当時私は38歳。日本語は話せず、日本文化についてもほとんど理解していませんでした。宣教師になる前はバリバリの「ビジネスウーマン」で、アメリカ人らしく大きな声、大きな態度、強い意思表示。来日当初は英語教師をしながら教会で働いて、それなりに楽しくはありましたが、ずっと英語教師をメインの仕事としてやり続ける生活は望んでいませんでした。イエスキリストの生涯がそうだったように、実際的な助けを必要としている人の力になりたいと思いました。

来日前、宣教師になるために通った神学校で尊敬していた教授は、人工妊娠中絶の問題や社会に与える影響についてよく話していました。日本に来てから、困っている妊婦さんを助ける方法があるのかをいろいろな人に聞いて回ってみたところ、ほとんど無い、ということがわかりました。そこで、自分の家を妊婦さんの一時的な住まいとして提供しよう！と思ったのです。でも、そのように決意したところで、困っている妊婦さんに私の自宅を見つけてもらう方法がありません。そこで団体を作ることにしました。

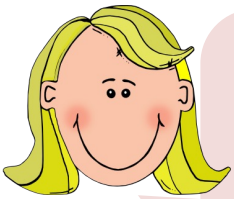
2005年　3月31日、ライフ・ホープ・ネットワーク創立。

前述のシンシアの神学校の教授の紹介で、LIFE Internationalというアメリカの団体とつながることができました。この団体から、困っている妊婦さんに寄り添う方法について研修を受けました。シンシアのほか、趣旨に賛同する日本人クリスチャン20人以上が受講しました。その方々の尽力により、フリーダイヤル、Eメールアドレス、ウェブサイト、チラシ、マニュアル、事務所など、団体として活動するために必要なものを整えることができました。

日本にまだ特定妊婦という言葉が存在せず、妊娠SOSも今のように普及していなかった時代。既存の福祉制度やサービスの分類に当てはまらない私たちの活動は、最初は区役所や関係機関から戸惑いの目で見られました。その初期の頃にも、私たちの活動に賛同し、応援してくださる医師、助産師、牧師、友人たちがいたことにより、今日に至るまでの団体の基盤を作ることができました。特に、この時期にマネージャーを務めた橋本好恵さん、塚本春美さん、田良島啓子さんの3名は、活動を立ち上げて軌道に乗せるために不可欠な存在でした。

活動を始めた頃に駅前で配っていたチラシ→

←来日したばかりの頃の写真。一緒に写っているのは同じ宣教団体から日本に派遣された宣教師。



初めての出産の立会いは決して忘れられません。その後多くの出産に立ち会うことができたのも奇跡だと思っています。最初に出産した女性とその赤ちゃんとは長期にわたって一緒に暮らし、その期間が私にとって重要な学びの経験になりました。初期のホームステイたちのおかげで私の日本語は上達しました。アメリカと比較して、日本では食べ物への興味関心が高いことも知りました。当時の私はあまり料理の経験がなく、マンションの隣の部屋に住んでいた田良島啓子さんにとても助けてもらいました。料理をする時に光の速度で動く彼女の手際の良さが私の目標になりました。

手さぐりで始まった活動

私がLHNを知ったのは、シンシアが私の住むマンションの隣の部屋に引っ越して来た事でした。その頃のLHNは立ち上げたばかりで、ボランティアスタッフも不足し、すべての活動も手さぐり状態で、ただシンシアの情熱で進んでいた様なところがありました。私自身いろいろ悩む事があり、他人の人生に踏み込む様なめんどうな事にはかかわりたくないと思っていましたので、この活動は難しいのによくやるなと考えていました。

ある時、誘われて事務所に行き、飾られていた赤ちゃんの写真を見て、LHNの活動で救われた赤ちゃんだと知り、心に響くものを感じました。もし、この赤ちゃんの母親が相談していなかったら、この赤ちゃんはこの世に存在していなかったのだと思うと、LHNの働きがとても意味あるものと思えたのです。
その後、クリスチャンとなり本格的にLHNの活動に取り組む事を決めました。その当時は今と違い、認知度もなく、活動を理解してもらうため、病院、区役所、保健所などに出向いて説明したり、教会に支援のお願いに行ったりもしました。
また、ホームステイのために乳児院に付き添ったり、一緒に買い物に行くと息子のお嫁さんと孫に間違えられたりしました。ホームステイもいろいろなケースがあり、少しずつその関わりの方法も考えながら、規約を作っていきました。

相談内容は、どれも簡単に解決できるものではなく、本人と周囲との関係や、覚悟など、今までの人生、そしてこれからの生き方を問うものだけに、真剣に取り組むことが要求されました。その中にあって、相談から数年後に「あの時の赤ちゃんが幼稚園に通っています」「すべての事を理解してくれる人と結婚します」「あの時の苦しい状況を乗り越え、今は安定した生活に戻れました」とかの報告は嬉しい限りです。
ホームステイを卒業し、他の場所で新しい生き方をしている女性や赤ちゃんが時々遊びに来てくれ、赤ちゃんに会えるのは現在の楽しみです。

（理事　田良島啓子）

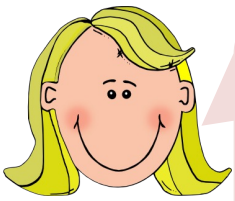
2008年　中絶後カウンセリング開始。

妊娠相談窓口開設後3年の間に、人工妊娠中絶後の苦しみに関する相談も多数寄せられていました。この分野でも助けを必要としている人がいることに気づき、創立時に協力してもらったLIFE Internationalに再度依頼して中絶後のストレスについて研修を受けました。中絶後カウンセリングは妊娠相談とはまったく性質が違い、カウンセリングをやれる人も、やりたい人も、限られていました。残念ながらこの時期にLHNを去ったボランティアカウンセラーもいましたが、これが私たちのやるべきことだとわかっていました。困っている妊婦さんと同様に、中絶後の女性たちも誰にも言えない苦しみを抱え、助けを必要としていました。

2008年　現在の場所（名古屋市中川区）に移転。

創立間もない頃は、「小さな命を守る会」によくホームステイが必要な妊婦さんを紹介してもらっていましたが、最初にシンシアが住んでいたのはエレベーターのないマンションの5階で、妊婦さんにとって良い場所とは言えませんでした。移転先を探し始めたものの、この謎の団体に家を貸そうという人はなかなか見つかりませんでした。それでも神様の恵みにより、現在の素晴らしい二階建ての一軒家を借りることができました。

2010年　シンシアが特別養子縁組でマイカを迎える。



ある事情により、ダウン症の3歳の男の子をしばらく預かることになりました。世話をする中でその子に愛情を感じるようになり、養親を見つけるのが絶望的な状況であることも知って、私はその子を自分の息子として迎えることにしました。当時は48歳独身。母親になることは全く想像していなかったことでしたが、神様が力を与えてくださると信じて決断しました。こうしてLHNの事務所兼自宅は小さな男の子が走り回り、ホームステイとの生活はより家族らしくなりました。

ライフ・ホープ・ネットワークが隣人になった日

「ライフ・ホープ・ネットワークという団体に、会社の倉庫として購入した家屋を貸したい」と兄が言い出したとき、父と私（妹）は大反対しました。特別養子縁組？ 事情のある妊婦さんがホームステイ？ しかも責任者は外国人？？はあ？ まさか、まさか、ぜったい反対！

けれども、兄は譲りません。とうとう、先方の「外国人」と面談する手はずを整えてしまいました。その日、初めて会うシンシアさんは、ザ・ヤンキー娘でした。明るい笑顔、魅力的な話し方、それでいて謙虚な態度。まずは戦前派の父がノックダウンで、その場で「オッケー」を出しました。でも私は、まだ抵抗しました。直接「ノー」が言えなかったので、「となりはお弁当の材料工場で、匂いもひどいし、音もうるさいです。引っ越しはやめたほうがいいと思います」など、引っ越してこない方がいい理由を並べました。

まあ、そのようなささいな抵抗がシンシアさん（かみさま?）の行く手を阻むはずもなく、LHNは引っ越しを決め、シンシアさんはわたしたちの「隣人」となりました。

LHNにホームステイした女性たちのひとりひとりの人生に、あの家が少しでも役に立ったことは、ほんとうによかったです。

そしてシンシア、ここに来てくれて、わたしたちの友だちになってくれて本当にありがとう。シンシアとマイカのいない人生は、いまでは考えられません。

（現在の事務所の貸主　近藤起久子さん）

マイカは愛の子

マイカとの出会いは、マイカが6歳のとき、露橋小学校の入学式でした。
入学した頃のマイカは、手をつなげば歩くけど1人では歩こうとしない、給食は、固形物は食べようとせず、スープしか飲まない、お昼過ぎると疲れて寝てしまう・・・
でも、少しずつ少しずつ、1人でも歩くようになり、食べられるものも増えてきて、彼の世界が広がってきました。
そして、気がつけば、マイカは学校中の人気者でした。いろいろな学年の子たちから「マイカ、マイカ」と声をかけられるようになっていました。

小学校時代のマイカの思い出はたくさんあります。ありすぎて何を書いたらいいのか・・・
今でも覚えていることがあります。マイカが5年生のときのことです。当時のクラスメートのRくんが体調を崩し、教室で倒れてしまいました。他の教員の助けを求めたいと思いましたが、Rくんから離れることはできません。そこで、私たちの様子を心配そうに見ていたマイカに、誰か他の先生を呼んできてくれるように頼みました。マイカは、すぐに教室を出ていき、しばらくして養護教諭と一緒に戻ってきたのです。
後で養護教諭に聞いたら、大きな声で「せんせい、せんせい」と言いながら保健室に入ってきたそうです。そして手を引っ張って連れてきてくれたのです。Rくんはその後回復、迎えにきてくださった保護者と一緒に帰って行きました。その時の、安心したマイカの笑顔、今でも忘れられません。

マイカの周りは、いつも笑顔と優しさであふれていました。
もちろん、マイカ、いつでもいわゆる「いい子」であったわけでは決してありません笑
いたずらもしたし、ちょっといじわるもしたし・・・
そうそう、私のスマホのフォトフォルダーのアルバムには、オーマイガー、という名のフォルダーがあって、マイカのいたずらの証拠がしっかり残っています。

私は、マイカの卒業と同時に定年退職、現役を卒業しました。マイカが私の最後の卒業生です。マイカとの6年間、マイカや、シンシアをはじめとしたマイカを支えるひとたち（チームマイカ）から、たくさんの愛と優しさをいただきました。
マイカは、まさに愛の子です。マイカとの出会いに本当に感謝しています。

マイカ
生まれてきてくれてありがとう。
出会ってくれてありがとう。

（露橋小学校特別支援学級元教諭　南部順子先生）

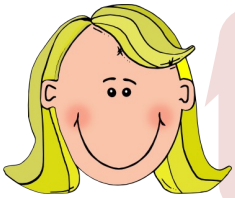
写真左：シンシアの家に来たばかりの頃のマイカ。
写真右：2025年3月のマイカ。18歳の誕生日会にて。一緒に写っているのは事務所の貸主の起久子さん。

2011年　初めてのテレビ取材。

東日本大震災後、中京テレビのディレクターから特別養子縁組についての取材を受けました。その後LHNのホームステイに密着した撮影が行われ、ドキュメンタリーシリーズ「マザーズ」の第一回で放映されました。
その後もいろいろなメディアにたびたび取り上げていただき、私たちの活動にも良い影響がありました。特別養子縁組や思いがけない妊娠、中絶は日本の大きな社会課題であり、その啓発にメディアが大きな役割を果たしています。

2014年　12月9日、一般社団法人設立。

一般社団法人となった直後の2015年には新規相談者数が前年比1.4倍になり、翌2016年に初めて年間300人を超えました。創立当初は当惑されていた行政機関から少しずつ信頼を得るようになり、愛知県内の市役所・区役所からの紹介で来るホームステイも増えました。2014年には「なごや妊娠SOS」も開設され、頼る場所のない妊婦さんの問題が社会的にも注目を集めるようになってきました。



行政機関や他の民間機関の相談員との連携は、LHNの活動にとって非常に重要です。時に業務の枠を超えて、困っている女性を助けるために力を注ぐケースワーカー/支援員/相談員の方々を尊敬します。日本は、子どもや妊産婦の支援、特別養子縁組の推進に関して急成長を遂げました。素晴らしい国ですね！

この頃から今に至るまでの約10年の間に、LHNは組織としての体制が整い、認知度も上がりました。財務面でも、100%民間の寄付による運営であることは創立以来変わりませんが、シンシアとつながりのあるアメリカからの寄付に大きく頼っていたところから、徐々に日本国内のサポーターも増えてきました。
また、助産師会など他団体の講演会や勉強会でお話しする機会も多くいただくようになりました。細々と手探りで続けていた活動がいつの間にか「先駆者」になっていました。

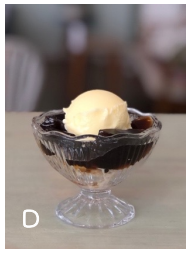
2015年　6月、カフェ・モナミがオープン。

事務所から徒歩数分の場所でカフェ事業を始めました。オープニングスタッフの一人は当時ちょうどステイしていた接客の得意なホームステイでした。以来、多くのホームステイがモナミでアルバイトをし、そのうち2名は店長にまでなりました。ホームステイにとって、モナミは気軽に行って息抜きをし、他のスタッフや常連客と交流をする場になっています。同じ場所で日曜日には教会の礼拝を行なっていて、教会のメンバーとの関わりもホームステイを元気づけています。誰でも自由に出入りできるカフェという場所があることで、友人や近所の方々、LHNを応援したいと思っている方々、新旧のホームステイやスタッフなど、さまざまな人たちが集うコミュニティができました。モナミは私たちのDNAを構成する一部です。

A

B

C


D

写真A：カフェ外観。
写真B：ホームステイ卒業生の子どもと教会スタッフ。教会のクリスマス会にて。
写真C・D：季節ごとに変わる多彩なメニューでご来店お待ちしています！

2016年　現代表のミヨコがLHNのボランティアスタッフになる。

↑関わり始めたばかりの頃。赤ちゃんを抱いたのは恐らくこれが人生初。

ミヨコは2014年からシンシアの教会に通い始めてLHNについて知り、「何か手伝えることがあったら手伝うよ」という軽い一言から少しずつ関わるようになりました。当時は一般企業の会社員で、業種も医療福祉とは無関係の製造業。先輩ボランティアの指導の下、仕事から帰った後の平日夜や土日にメール相談の返信をする程度でした。そこから不思議な導きにより、3年後にはLHNにより多く時間を使えるよう会社の勤務日数を減らし、さらにその4年後には完全に退職してLHNの代表になる・・・などという道を作るのですから神様はすごいですね。

2020年　ホームステイ卒業生のアナがフィリピンに帰国。

↑アナと娘のシンシア、そして名付けの由来になった「養母」シンシアとマイカ。

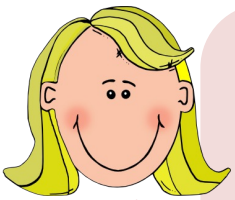
2016年にホームステイとしてLHNにやって来たアナは、女の子を出産した後も、LHNとカフェ・モナミに深く関わってくれていました。シンシアと一緒に生活した期間も長く、シンシアは日本の普通養子縁組制度によってアナを自分の養子にまでしました。モナミでは、一人で何人分もの仕事をこなす働き者の店長として活躍しました。そのアナと娘が母国フィリピンに帰国しなければならなくなり、実務面でも心理面でも私たちは打撃を受けました。（その後、大きな穴を埋める働き手たちに奇跡的に恵まれ、カフェは営業を続けています！）

2020年　コロナ禍で中絶後相談が急増。

2020年の中絶後相談の相談者数が前年比2.3倍に急増しました。一方で政府の統計ではこの期間に中絶手術の件数が増加したという報告はありません。中絶手術自体の急増ではなく、コロナ禍で一人で過ごす時間が増え、過去の中絶経験を振り返って考える人が増えたことによるものと推測しています。
この期間に新しいカンセラーも増え、今の中絶後カウンセリングチームの基礎ができました。

2024年　シンシアから日本人スタッフへの部分的な引き継ぎ。

4月に富田美代子がLHNの代表になりました。また、4月から12月まで宮内真喜子さんが住み込みのスタッフとして働きました。宮内さんは2025年1月からは九州の地元に戻っていますが、シンシアの間近でホームステイや電話相談について学んだ経験を活かし、引き続き電話相談の対応を一部受け持っています。
今後、創立者のシンシアが築いてきた基盤を引き継ぎつつ、今の日本社会の状況に合わせた日本人主体の運営方法を模索していきます。

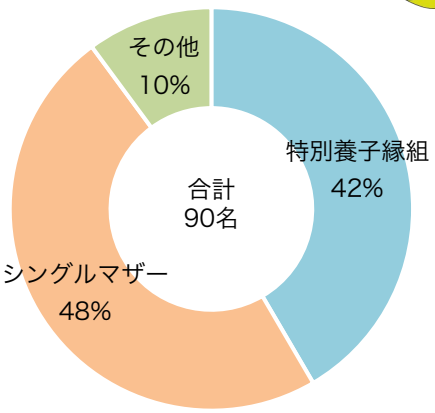


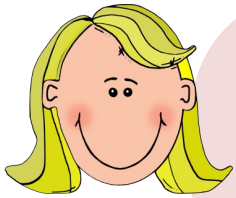
創立から19年を経てとうとう日本人が責任者になりました！代表交代から1年経過し、すでにその成果が見えています。
これまで多くの日本人が私を支えてきてくれたように私も彼女を支えたいと思います。LHNが10年続くとさえ思っていませんでしたが、なんと将来への展望も持てる状態で20周年を迎えることができました。ここまで神様が私たちを守り、導き、励まし続けてくださったことに感謝します。また、これまで関わった全てのボランティアの方々、寄付によって支えてくださったサポーターの方々にも感謝します。皆様の存在がなければ、LHNはただのちょっとおかしいアメリカ人の夢で終わっていたでしょう。

活動スポットライト１：ホームステイ

これまでにシンシアと一緒に暮らした妊婦さんは約90名。ホームステイには至らなくても、病院や区役所に付き添ったり、何度も電話や面談で話を聞いたりするなど、密接な関わりを持った女性も数多くいます。

過去20年間のホームステイの出産後の選択
(2005年3月～2025年2月)





ホームステイが私の人生にこれほど重要な存在になるとは思ってもみませんでした。ホームステイの一人は、成人の普通養子縁組で私自身の養子にまでなったのです。困難な時や眠れない夜も何度もありましたが、ホームステイのおかげで私の人生は豊かになりました。ホームステイの女性たちを通して、どのように人に仕えるかを学びました。一度口にしたら取り消すことのできない自分の発言に慎重になることも学びました。そして、最初の頃と比べれば自分が忍耐強くなったと思いたいです。私たちは誰もが完璧ではなく、成長の途中なのですから。
これまで多くのホームステイが困難を乗り越え、良い人生を歩み始めるのを見ることができたのは大きな特権です。どんな状況にあっても皆、「産んでよかった！」と言うのをこの耳で聞いてきました。そんなホームステイは今も私にとって友だちでありヒーローです。

シンシアさんとの暮らし

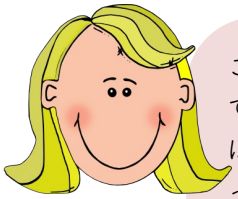
出産後の生活は、妊娠中に借りていたLHNの部屋で、しばらく赤ちゃんとの二人暮らしを考えていました。産後も1人で大丈夫だろうと思っていました。

出産を迎える少し前に、シンシアさんから「赤ちゃんを産んだ後は、大変な事もあると思うから、しばらく一緒に住みませんか？」とシンシアさんからの声かけがありました。当時、シンシアさんの自宅のお隣にスタッフの田良島さんが住んでいたので、退院後は食事の準備だったり、赤ちゃんを抱っこしてもらっている間に、お風呂にはいったり、気晴らしに1人で近くのスーパーに行ったりなど、お手伝いをしてもらい、とても助かりました。また、シングルマザーとして今後、仕事や住むところなど、どうしていけばいいのだろうと考えると、心が不安定な時もありましたが、近くに信頼できる人や話し相手になってくれる誰かがいつも側にいてくれました。そっと側で支えてくれたことが心強く、そして楽しく前向きな気持ちで生活をすることができました。

まったく英語が話せない私と、あまり日本語が得意じゃないシンシアさんでしたが、簡単な日本語でコミニュケーションをとって話をしたり、お互いの考えを聞いたり、聖書の話をしたり過ごしていました。また、シンシアさんのお友達のドイツ人やイギリス人、中国人の方々や、英語のレッスンの生徒さんや近くに住む外国人の小学校など、ホームステイ中にたくさんの出会いがありました。一緒に過ごした日々の中で、いろいろな家族のありかたや多様な考え、支えてくれる誰かがいる事、いままでの生活では考えた事がなかった事など多くの学びがありました。出産して18年経った今でも、赤ちゃんを迎えいれるサポートをしてくださった、LHNの皆さんに今でも感謝しています。

これからも、世界にたった一つの小さな素晴らしい命を守る活動を続けられますように…
心から応援しています。

（2006年にホームステイし、出産したSさん）



この働きのもう一人のヒーローは助産師さんたちです。活動初期には橋本好恵さん、そしてその後は今に至るまで篠田恵見さんが10年以上、私にとって不可欠なパートナーでした。どんなに多忙でも、私やホームステイの質問や心配事を、電話・訪問で解決してくれました。助産師さんたちのおかげでこの家には安心と平安があります。恵見さんは、私がただ誰かに話を聴いてもらいたい時のカウンセラー役でもあります。

ホームステイに寄り添って助産師として与えられる恵み

十数年前、LHNの活動を知り、ホームステイされる女性達と出会う経験を重ねてきました。人数としては多くはありませんが、おひとりおひとりの人生の大切な時期に助産師として関わることができた思い出は、時間が経っても鮮やかな記憶に残っています。それはホームステイにたどり着くまでに彼女達は様々な苦難を経験し、多くの不安や悩みを抱えていて、素直に妊娠出産を喜んで迎えられる状況ではない人が多く、彼女や生まれる新しい命のことを祈らずにはいられなかったからだと思います。

助産師としてホームステイにできるお手伝いは、少しでも出産に向けて心配事を減らし、落ち着いてマタニティライフが過せるよう、体調や生活面で心配ごとがあれば相談にのったり、出産に向けて呼吸法や育児練習などを行うこともあります。お産後は出産という大仕事を成し遂げたことを労い、授乳のこと、赤ちゃんのお世話などで不安があれば相談にのり、沐浴などを一緒に行ったり避妊のお話などもします。

妊娠中から子育てまでの不安が大きい大切な時期に、継続して関わることは助産師として理想ですが、残念ながら今の日本では細切れの関わりしかできていない状況があります。ホームステイを「近所のお節介なお産婆さん」として訪ねることは、双方に安心できてとても良いと感じています。ライフホープを卒業された後も消息を知らせてくれることがあり、ささやかな寄り添いが少しでもお役に立てたのかなと嬉しく思うとともに私の原動力にもなっていて主の恵みだと思います。

最後に、ホームステイをされてシングルマザーを選んだ方も、特別養子縁組をされた方も、新しい命が生まれる為に頑張ったことを誇りに歩んでいかれることを祈っています。

（理事・助産師　篠田恵見）

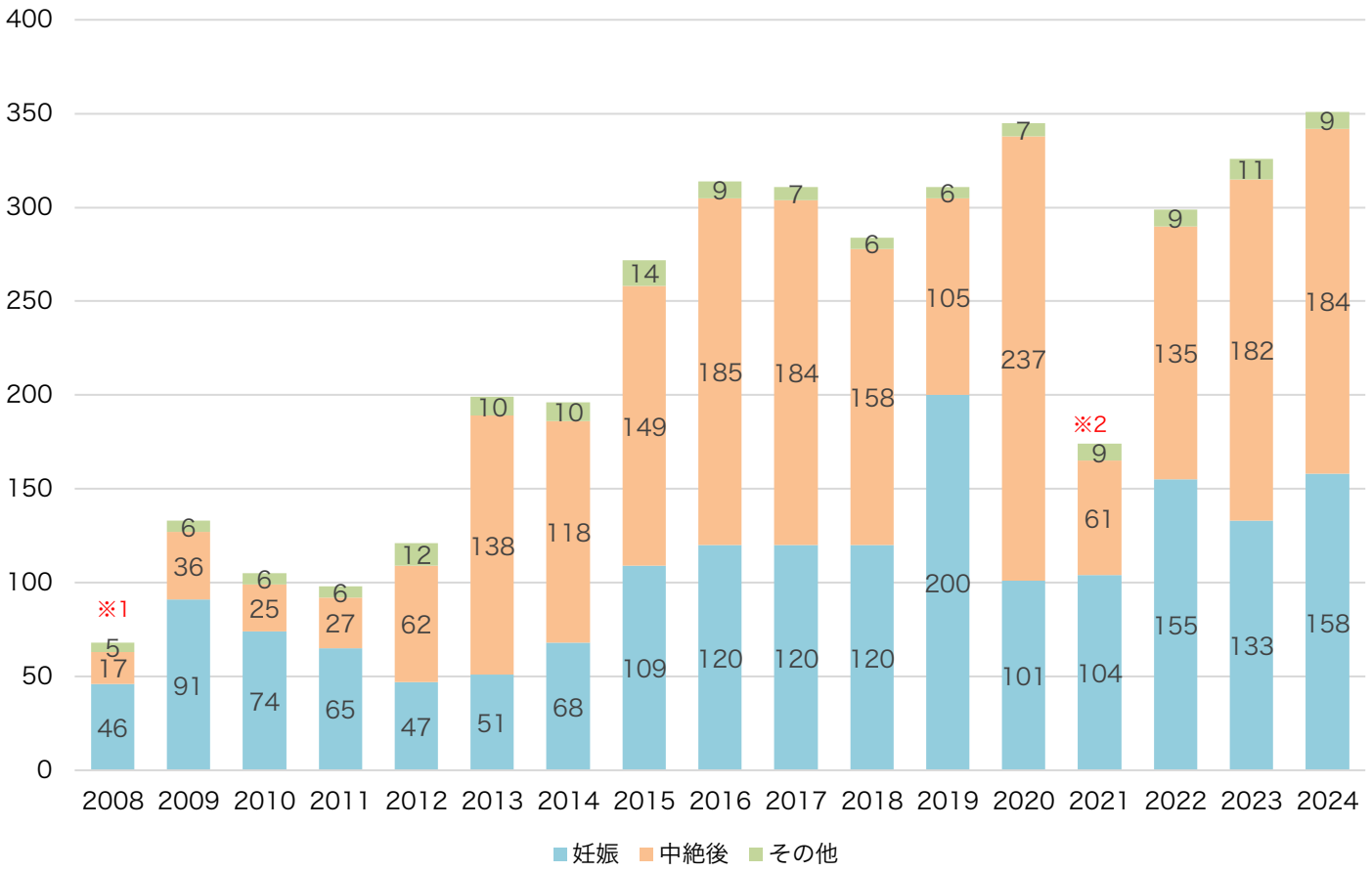
活動スポットライト２：妊娠・中絶後相談

過去20年の間にLHNに寄せられた妊娠・中絶後相談の相談者数は4,000人以上に上ります。でも本当は私たちにとって相談者の数そのものは重要な指標ではありません。専門職が常駐する一般的な妊娠SOSとは違い、私たちはただのボランティア。多くの人に届くことよりも、私たちを必要としている人に届くこと、そしてその人たちの話に丁寧に耳を傾け、力になることを重視してきました。具体的には、次のようなことで悩んでいる方々（時にはご本人だけではなくその家族やパートナー）と積極的に関わることを目的として相談窓口を運営しています。

①産むかどうか迷っている
②妊娠していて住む場所に困っている
③産みたいと思っているけれど応援してくれる人がいない
④赤ちゃんを特別養子縁組に託すことを考えている
⑤中絶後のストレスに苦しんでいる

限られた人員で365日の対応をしているため、理想的ではない環境で電話を取らざるを得ない時もあり、日本語が完璧ではないアメリカ人（名前は秘密です）が電話相談の大半に対応していた時期も長く続きました。それでも相談は途絶えず、窓口開設から20年が経ちました。現在はほぼ1日に1人のペースで新規の相談を受けています。
これからも一人一人と丁寧に向き合い、相談者とお腹の赤ちゃんにとってどうするのが一番良いのかを、相談者と一緒に考えていきたいと思います。

新規相談者数の推移 (2008年1月～2024年12月)



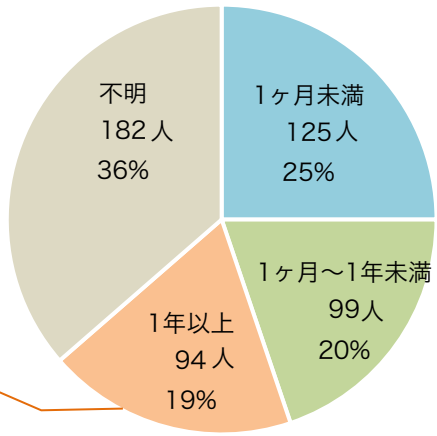
※1 活動開始後最初の3年間(2005～2007)は年度別の正確なデータがないため非掲載。
※2 2021年度は、システム障害により相談受付ができない期間あり。

活動スポットライト３：中絶後カウンセリング

LHNでは、中絶後の回復のためにステップカウンセリングというメールでのカウンセリングを行っています。聖書が教える心の傷の回復のプロセスを基にしたもので、相談者にはメールで簡単なテキストを送り、テキストの内容に沿ってカウンセラーとメールのやり取りをしながら進めていきます。これまでは文字情報のみのテキストでしたが、2025年春に動画版が完成予定です！2025年3月現在、試験運用を開始しています。まとまった文章を読むことが苦手な方でも取り組みやすくなることを願っています。

中絶後の相談は、中絶手術直後とは限りません。半年後などある程度落ち着いてから連絡をくださる方や、10年以上前の手術のことが忘れられずに相談くださる方も珍しくありません。妊娠の相談窓口が全国各地に設置されるようになった今でも中絶後相談に対応している窓口は少なく、「ようやく相談できる場所を見つけた」という声も聞きます。LHNで対応できている相談者数以上に、潜在的ニーズは大きいものと考えられます。

相談時の中絶後経過日数
(2022年1月～2024年12月)



1年以上経過後の相談者
94名のうち26名は
10年以上経過

ライフ・ホープ・ネットワーク20周年を迎えて

私達のボランティア（特に中絶後の相談）は、相談者の相談後の結果や結論、あるいは、その方の変えられた生き方を知ることも、確かめることも出来ない、成果を確認できない働きですが、相談者の方々が少しずつ苦しみから解放、回復されていく様子を文字を通して知ることは出来ます。また、私達とのメール相談で交わされる心の深いところの交流は相談後もなお、彼女たちを励まし続けることが出来るのではないかと思っています。異口同音に示される言葉は、中絶の事実をご自分の責任として自分を責める言葉、そして、私たちに向けられる「優しい言葉をかけてくださり、励まされます」という言葉。これらが示しているのはいかに人々が助けを必要としているかということではないかと思います。

私達は彼女たちの、その痛みに、苦しみに、寄り添うように伴走していけるよう心がけていますが、一旦、ステップ学習や、カウンセリングが終了してしまうと、そこで私たちの関係はいったん終わります。ですから、彼女たちに寄り添ってくださる方がおられるのだということを最後の最後にお伝え出来、受け取っていただけることが私たちボランティアの使命かと思っております。

2005年に立ち上げられたLHNは現在のネット社会が拡大されたからこその発展であったようにも思います。電話番をしながらオフィスでクライアントの相談を待っていたころが懐かしく思い出されます。良きことをなさる主に栄光を！！

（元マネージャー・ボランティアカウンセラー
塚本春美）

写真左から
塚本春美、富田美代子、マイカ、シンシア、田良島啓子

次の10年に向けて

LHNのあゆみは20年で「終着」ではありません。今日からまた次の10年に向けたあゆみが始まります。
10年後の姿は神様しか知りませんが、今の私たちが願い、祈っているビジョンを共有させていただきます。

1. チームでホーム

これまでほぼ一人でホームステイの生活を支えてきたシンシアも還暦を超え、そろそろ「次」のことを考えなければいけなくなってきました。（念のための補足：現在シンシアはとても元気です！）正直に言うと、これまでのシンシアの働きをそのままコピーして引き継げる人は、この地球上に一人もいないと思っています。特に今後外国人宣教師ではなく日本人が中心となることを前提として考えると、ホームステイプログラムについても一人ではなくチームでやっていくことが現実的です。
一方で、これまでの「おうち」を「施設」にしたくはありません。一緒に食事をし、くだらない話で盛り上がり、ステイする女性たちが家族のようにスタッフと関わることのできる体制は継続したいと思います。
それを実現するための具体的な場所や人員は現時点では決まっていません。ふさわしいタイミングで必要なものを神様が与えてくださることを祈っています。この働きに関心のある方はぜひお問い合わせください。

2. 中絶「前」に出会いたい

中絶後の相談者の多くは罪悪感と喪失感に苦しんでいます。私たちは、その方が前を向いて歩けるよう心を尽くしてカウンセリングをしますが、中絶を決断する前に私たちを見つけてほしかった、と思わずにはいられないことも頻繁にあります。「週数を気にして焦って決めてしまった」「もっと相談すればよかった」と後悔する相談者も多く、中絶後の精神的苦痛について事前に十分な説明を受けられなかったことを悔やむ方もいます。人生を変える重大な決断をする前に、本当にその決断で良いのかを親身になって一緒に考える第三者が必要です。これまでも妊娠相談の一環で実施してきましたが、中絶を迷っている方や、手術の予約を入れたけれども心から納得できていない方のための「中絶前相談」を今後拡充したいと思います。

3. 予期せぬ妊娠→誕生の喜び

ホームステイを通して、私たちはいつもいのちの喜びを教えられています。お金がなくても、パートナーがいなくても、高校生でも、自分で育てられなくても、どんな状況でも出産後の女性が言うのは「産んでよかった」です。産まなきゃよかったと言う人はいません。
一方日本社会には、子どもを養子縁組に託すことや「未婚の母」になることに対してまだ根強い偏見があります。周囲に相談できず、インターネットで調べて余計に心無い言葉に傷つく、というケースも多くあります。勇気を出して相談したら「産むのはあなたのエゴ」と言われた、という経験談も聞きます。
さまざまな妊婦さんを支援してきたグループとして、妊娠した環境が理想的ではなくても出産を選んだ人たちのリアルな声を届け、これから産もうとしている人たちを応援したいと思います。

活動を支えるサポーターの皆様へ

これまで活動を担ってきてくださったボランティアの方々に心から感謝いたします。この冊子に名前が登場した方以外にも、メールカウンセリング、事務、ホームステイの食事作りなど、さまざまな分野で助けてくださった（くださっている）ボランティアが多数いらっしゃいます。その方々の存在なくしてはLHNの20周年はありません。

また、私たちの活動を経済的に支えてきてくださった皆様にも厚くお礼申し上げます。寄付のみを財源とする私たちにとって、皆様からの寄付は実際的な助けであると同時に大きな心の励みでもあります。
現在、LHNの財務は過渡期にあります。これまでは、大部分の働きを担ってきたシンシアがアメリカから宣教師としての給与を受け取っていることにより、LHNとして人件費の支出をほとんどせずに運営することができていました。今後日本人を中心とした体制にシフトしていくには、これまでよりも大きな予算が必要になることが予測されます。

次の20年のために、引き続き皆様からのご支援をいただければ幸いです。また、サポーターの輪に新たに加わってくださる方がいらっしゃれば大変嬉しく思います。具体的な方法を以下にご案内いたします。

経済的なサポートの方法

● お振り込み：ゆうちょ銀行の口座から
00850-5-131374
「ライフ・ホープ・ネットワーク」

● お振り込み：他行の口座から
ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900 / 店番 089）
当座　口座番号 0131374

●クレジット決済
Ready For（レディー・フォー）のウェブサイトよりお申し込みいただけます。
（毎月定額のご寄付となります）
https://readyfor.jp/projects/lifehopenetwork

その他のサポートの方法

●定期的に情報を受け取る
サポーターにご登録いただいた方にはニュースレターをお送りいたします。
ウェブサイトよりご登録ください。

●必要な人に情報を届ける
お勧め先にLHNのパンフレットを置かせていただける方、必要としている方にお渡しいただける方はぜひご連絡ください。

●ボランティアをする
時期により必要な役割が変わります。
詳細は事務局までお問い合わせください。

お問い合わせ先

●事務局
〒454-0023 名古屋市中川区石場町2-23-2
052-363-3393 support@lifehopenet.com

●カフェ・モナミ
〒454-0022 名古屋市中川区露橋2-29-13
[営業時間]火・水・木・金曜日 11:30-15:30

https://www.lifehopenet.com　life_hope_network　lifehopenet　LifeHopeNetwork

発行者：一般社団法人ライフ・ホープ・ネットワーク
発行日：2025年3月